

ワークショップ2: 在宅医療における泌尿器科医の役割

人生 100 年時代における訪問看護の現状
～最期まで生ききることを支えるとは～原三信病院訪問看護ステーションおおはま¹⁾ 原三信病院緩和ケアチーム²⁾染矢麻衣子*¹⁾²⁾・志賀健一郎²⁾・野口賢一²⁾・那須百合美¹⁾

抄録:

がん患者は高齢者が多く、終末期医療を自宅で迎えたい方が訪問看護を受け住み慣れた環境で日常生活を送る選択肢を提供することは重要である。訪問看護でも患者・家族の価値観を尊重した意思決定を支え、包括的な支援を行うことが重要であると考え。今回、50 歳台男性がん患者の事例を通じて、家族との対話や心理的支援の実際を提示し、アドバンスケアプランニング（ACP）の実践が患者の尊厳ある終末期に寄与することを実感した。本稿では訪問看護における ACP のあり方を若干の文献的考察を踏まえつつ論じる。

(西日泌尿. 87: 199-200, 2025)

キーワード: 訪問看護, アドバンス・ケア・プランニング, 意思決定支援, 家族ケア

緒 言

2025 年には急速に進む少子化を背景に団塊の世代が後期高齢者となることから、がん患者の 7 割超が高齢者であることを踏まえ、限られたマンパワーの中で約 6 割の終末期を自宅で迎えたい希望を如何に叶えるかが重要となる¹⁾²⁾。当訪問看護ステーションは看護師、理学療法士、ケアマネージャなどからなる 8 名のスタッフで福岡市とその周辺の訪問看護を行い、2023 年度で在宅での看取りも 10 件経験した。このような条件のもと、本人と家族との対話の中でどのような人生の最後を迎えたいかを繰り返し話し合い、本人たちにより良い答えを見つけ出しその環境を整え、終末期を家族とともに迎える経験をした。

症 例

50 歳台男性。当所介入開始時には右腎がんと多発転移（肺、骨、リンパ節）の診断。妻（日中就業）、長男（小 6）との 3 人暮らし。X 年 9 月から 3 カ月間介入した。

がん診断後、下肢麻痺に対し胸腰椎転移部に緩和照射を行い、当院泌尿器科に紹介。根治的腎摘除術後に分子標的薬が投与されるも胸水増加など病勢の増悪を認めた。主治医より緩和医療への移行の提言があり、本人も自宅

退院の希望が強いため当ステーションへ紹介となった。

介入開始後、患者本人だけでなく家族への包括的な支援を行った。患者は「もうどのくらい生きられるかわからない」と涙ながらに語りつつも、「息子に自分の病状を話し、妻に息子を頼みたい」との思いを共有した。さらに、患者が家族に対して深い責任感を抱きながらも、孤独を感じている様子を伺った。一方妻は患者が病状や今後の意向について話さないことに悩んでおり、私たちは患者が本心では「息子や妻のために話すべきことは話したい」と考えていることを伝え、妻が理解するきっかけとなり家族全体で終末期の意向を話し合うこととなった。また、息子は衰弱していく父に戸惑いを見せており、具体的な介助方法を教えながら「お父さんに触れることで、彼のつらさが和らぐ」と説明し、家族が支えふれあうことの重要性を伝えることが出来た。また、息子は自分のせいで父ががんになったのではと不安を吐露し、がんが命に直結する病気であると理解していることを察知したため、息子に普通に小学校に通い、友達と遊んでよいと伝え、普通に生活している姿を患者である父に見せることの大切さを語り、息子の笑顔を取り戻すことが出来た。そして、数カ月と短い期間ではあったものの本人の希望する場所で家族と共に穏やかな時間を過ごすことができた。

考 察

今回我々は、自宅で最期を迎えたいと希望するがん末

* 〒812-0033 福岡県福岡市博多区大博町 1 番 8 号

TEL 092-262-4626, FAX 092-291-3046

E-mail ohama@harasanshin.or.jp

受付日: 2025 年 2 月 4 日

受理日: 2025 年 3 月 10 日

期患者の気持ちを妻や息子と会話し介入することで訪問看護師がACPのプロセスを通じて患者・家族の絆を深め、自宅での穏やかな看取りまでの時間の共有を実現した例を提示した。

ACPのプロセスは、本人や家族に意向に添った選択肢を提示しつつ、それが適切であったかどうかを医療・ケアチームとともに検討し、再度本人や家族と振り返るプロセスを繰り返すことである³⁾。今回のケースではなかなか自身の希望を妻や息子に伝えられない患者に寄り添い、家族に各々そのアプローチの手段を提示し徐々に家族のきずなを深める経験が出来た。様々な選択肢も重要ではあるものの、今回のようなコミュニケーションのきっかけとなるような手段を本人と家族らに提供できたことも、このようなプロセスにははっきりと提示できていないものの、最後の時を本人と家族が安らかに迎えるにあたり非常に重要であると思えた。

今回の症例では訪問看護師が一人で介入し患者と家族のケアにあたった。忙しい日々の中で、医師や他の看護師、薬剤師、栄養士、訪問介護士、ソーシャルワーカーといった他職種と連携を図り、医療・ケアチームとして関われば力強いものとなる可能性がある。今後、リモート会議ツールや情報共有アプリなどを活用することで、時間のかかるACPのプロセスをより充実したものにする可能性もある。

終末期のがん患者を親に持つ息子とのかかわりを持ったことも、大きな経験となった。死というものが現実としてどのようなことか分からないことが多い学童期の子供は、混乱や戸惑い、不安、悲しみなどの感情が入り乱れることが多い⁴⁾。今回自分のせいで父ががんになったのではと自責の念に駆られる息子に対し、親を支えたい気持ちに寄り添い具体的なマッサージ法を教えコミュニ

ケーションを図ることが出来た。子供が思う気持ちに対し、親の状況を正直にわかりやすく話し、学校などの安心できる場においても良いことを伝え、お別れの時間を大切にする状況を作り得たことが、有効であったと考えられた。

結 語

訪問看護は、患者が最期まで自分らしい生活を送るための重要な支えとなり、特にACPの実践は、患者と家族が共に意思決定を行い、最期を迎える準備を進める上で不可欠である。本事例が示すように、訪問看護師は患者と家族に寄り添いながら、医療的・心理的支援を提供することで、人生の最終段階における質の向上に寄与すると考えられた。

文 献

- 1) 日本財団；「人生の最期の迎え方に関する全国調査」
https://www.nippon-foundation.or.jp/wpcontent/uploads/2021/03/new_pr_20210329.pdf (2025 年 1 月 14 日閲覧)
- 2) がん情報サービス；「最新がん統計」
https://ganjoho.jp/reg_stat/statistics/stat/summary.html (2025 年 1 月 14 日閲覧)
- 3) 厚生労働科学特別研究事業「適切な緩和ケア提供のための緩和ケアガイドブックの改訂に関する研究」班（研究責任者：小川朝生）；新版 がん緩和ケアガイドブック。青海社。東京、95-105.
- 4) 並木瑠理江；終末期の親の闘病から死別後の子どもとその家族への支援に関する国内文献検討。Palliative Care Research. 18(4) : 225-234, 2023.

THE CURRENT STATE OF HOME NURSING IN THE ERA OF 100-YEAR LIFESPANS: SUPPORTING A LIFE LIVED TO THE END

MAIKO SOMEYA AND YURIMI NASU

Harasanshin Hospital Visiting Nursing Station Oohama, Fukuoka, Japan

MAIKO SOMEYA, KENICHIROU SHIGA AND KENICHI NOGUCHI

Harasanshin Hospital Palliative care team, Fukuoka, Japan

Abstract

Elderly cancer patients often prefer end-of-life care at home. Home nursing supports this by providing a familiar environment and respecting patient and family values. This paper examines a 50-year-old male cancer patient, emphasizing family dialogue, psychological support, and the role of advance care planning in a dignified end-of-life.
(Nishinohon J. Urol. 87 : 199-200, 2025)

key words : Home nursing, Advance Care Planning, Decision-making support, Family care